

平成 22 年度 SMMA 学校連携部会のまとめ

SMMA 学校連携部会

0 はじめに

そもそも、ミュージアム系社会教育施設（以下「ミュージアム」という）が学校と連携をするのは、どうしてなのだろうか。

ミュージアムは、子どもたちが来館すれば、大人（両親、祖父母など）も来館して来館者数が増えるから。子どもたちは将来の来館者となる見込みがあるから。一方、学校は、ミュージアムの専門的な職員から、学校ではできない専門的な解説、授業や体験をさせてもらえるから。

学校連携のためには、双方のメリットを考える前に、何のために学校連携をするのかという目的を考えることが大切であると考えます。

そこで、SMMA 学校連携部会は学校連携の目的を「子どもたちの知的好奇心を高め、ミュージアムリテラシーを育成していくこと」ととらえた。

ここで言うミュージアムリテラシーの育成とは、

子どもから大人までの各学びの段階で、ただ見るだけではなく、ミュージアムに親しみ、目的を持って活用し、使いこなす力を育てること
--

である。

ミュージアムが子どもたちにとって先生方にとっても「特別ではない、日常的な子どもたちの学ぶ空間」となるよう、今年度 4 館が参加して学校連携部会の取組を進めることとした。

1 学校連携部会の目標

- (1) ミュージアムリテラシー育成のため、ミュージアムが学校と連携した授業モデルを開発し、実践する。
- (2) 学校連携を軸としたミュージアムの横の連携関係をつくる。
- (3) ミュージアムが学校と連携した事例を Web で紹介、発信する。

2 参加館

仙台市博物館、仙台市科学館、せんだいメディアテーク、10-BOX

3 SMMA 学校連携部会構想図

※別紙参照

4 経過

6月18日(金)	第1回学校連携部会 (メディアテーク)	・各館の学校連携事業の情報交換 ・今後の進め方について
7月15日(木)	第2回学校連携部会 (博物館)	・今年度の学校連携事業の計画について ・学校連携 Web について
9月8日(水)	第3回学校連携部会 (メディアテーク)	・各館の学校連携事業の進捗状況について ・今後の進め方について
9月～2月	各館で学校連携事業の実施	※各館の学校連携の授業を見合う。
2月14日(月)	第4回学校連携部会 (メディアテーク)	・今年度の各館の学校連携事業の報告 ・学校連携部会のまとめ

5 SMMA学校連携部会の今年度の成果

(1) ミュージアムリテラシー育成のため、ミュージアムと学校が連携した授業モデルを開発し、実践する。

各館で小学校を対象として、各館の専門性を活かして、来館型授業、出前型授業による学校連携授業が行われた。

NO	名 称	来館型授業	出前型授業	昨年度
1	仙台市科学館	1校(120人)	26校(1920人)	10校(669人)
2	仙台市博物館	2校(192人)	10校(863人)	※リニューアル工事
3	メディアテーク	0校(0人)	11校(1025人)	6校(220人)
4	10-BOX	0校(0人)	5校(1091人)	4校(597人)

※ 仙台市科学館の市内中学2年生対象の悉皆の科学館学習(66校7758人)は除く。

※ 仙台市博物館の館内見学のレクチャーなどは除く。

科学館は、仙台市内の中学2年生を対象に悉皆で科学館学習を行っている。今年度は、小学校支援の拡充を重点目標にして、出前型授業の充実、来館型授業の開発と試行を行った。出前型授業では、先生方の教えにくいところ(エネルギー、地層、月の動きなど)をテーマにしたプログラムをつくり出前型授業を展開した。一人ひとりの子どもたちが自分のペースで試行錯誤をしながら、実験や体験ができるよう授業に工夫を行った。

博物館は、地域の文化・伝統という視点から、図工、美術と関連させたプログラムの開発に取り組んだ。これまでは、社会科の授業と関連させた博物館活用が多かったが、堤人形、するめてんばたなどの創作活動を通して、子どもたちに仙台の文化や歴史について関心を持たせることができた。

メディアテークは、平成 21 年度に行われた東北造形教育研究大会での小学校の図工部との連携をもとに、コマ撮りアニメーション、レモスコープの手法を用いた授業を実施した。映像を制作する時に、ペア、グループなどで活動、グループワークに役割分担を取り入れることで、技術だけでなく、協力・協働を重視した授業に取り組むことができた。

10-BOX は、小学校の学芸会の指導で出前型授業を行った。先生の動きをまねるだけの演技ではなく、眼力、他者との関係性などを具体的な場面を通してワークした。子どもたちの演技が借りものではなく、子どもたち自身の表現となった。

※詳しい内容は、各館の学校連携資料参照

今回の学校連携事業では、各館の専門性を活かした授業内容とともに、連携事業の進め方、仕組について各館から新たな可能性ある実践があった。

①学校連携授業の進め方の工夫～仙台市科学館＜来館型連携＞

科学館では、モジュール学習という方法を使って、黒松小学校と連携授業を行った。モジュール学習とは、科学館にある展示物を使って、科学館職員だけが展開する授業ではなく、科学館で作成したモジュール（略案）をもとに「子どもたちのことをよく知っている各学校の先生方が科学館の展示物を使って授業を行う」学習プログラムのことである。

小学校の先生が科学館の指導主事から事前研修を受け、科学館を教室として、科学館の展示物を教材として学習を展開した。子どもたちは、科学館の「ほんもの」の展示に触れ、興味・関心をもって学習をすることができた。先生は子どもを理解しているため、子どもたちの考えを引き出し、分かりやすい効果的な授業を行うことができた。

科学館の「ほんもの」の展示を使って先生がモジュール学習をすることは、出前型授業で館の職員が学校に行って授業をすることと同様な関係であると考えられる。

②ボランティアの方と連携しての学校連携の工夫～仙台市博物館＜来館型連携＞

仙台市博物館では、仙台城ガイドボランティアの会と連携して、仙台市博物館と仙台城址周辺をフィールドにして、宮城教育大学附属小学校、芦口小学校と連携授業を行った。博物館の展示を見学するだけでなく、エコミュージアムの考え方を生かして、仙台城址全体を使ってグループごとにテーマに沿ったフィールドワークを行った。博物館とボランティアが協力して授業を行うことで、地域の歴史についての見学、学習を深めることができた。

③学校連携の役割分担の工夫～せんだいメディアテーク＜出前型連携＞

昨年度、メディアテークでは職員が学校に行って出前授業を行っていた。今年度は、仙台市の小学校図工部会と連携して、コマ撮りアニメーションの授業を希望する学校の担当者が、研修を受講し、スキルを身につけ、担当者が授業を実践

することとした。学校とメディアテークが役割分担をし、それぞれの専門性を生かすことで、昨年度より多くの小学校で連携授業を行うことができ、広がりがみられた。

(2) 学校連携を軸としたミュージアムの横の連携関係をつくる。

今年度、生涯学習課の社会教育主事が学校・施設・地域連携担当となり、SMMA 学校連携部会を進めた。第1回学校連携部会で、各館の学校連携についての情報交換を行ったが、各館の学校連携担当の職員が他館のことを知らないという実態があった。

そこで、生涯学習課の学校・施設・地域連携担当の社会教育主事が学校連携のコーディネーター、情報の発信の窓口となり、各館の学校連携授業の様子についてメールを活用して、伝え、各館の横の連携をつくるように努力した。また、学校連携部会を行う場所を各館持ち回りとして、それぞれの館の様子を見学できるよう配慮した。各館の学校連携の状況を共有することで、科学館で行われるサイエンスインタプリタのボランティア研修会への参加を他館のボランティアさんに呼び掛けて参加するなど、かかわる側の人たちの横の連携にもつながった。

各館の担当者からは他館の学校連携授業の参観をしたいとの要望もあったが、これについては、それぞれの業務の調整がつかず、実施することはできなかった。

(3) ミュージアムが学校と連携した事例を Web で紹介、発信する。

今年度末までに、SMMA 編集局が取材したことをもとに、学校連携事例集を制作し、SMMA の Web で発信した。また、仙台市教育委員会 Web 「生涯学習情報」のわくわくどきどき体験学習とリンクを張り、学校関係者だけでなく、市民の方にもミュージアム系社会教育施設の子どもたちを対象とした取組を紹介、発信し、より多くの市民に学びを広げていくことが大切である。

6 SMMA 学校連携部会の今後の課題

現在策定中の仙台市の教育振興基本計画では、「学びのまち・仙台」を実現するために、市民が自らの能力や学んだ成果を社会の中で発揮することが可能となる仕組みづくりを掲げている。また、子ども、大人を問わず、体験型・参加型の学びの機会の拡充や様々な教育資源との連携の推進を図り、豊かな学びの機会を創出していくことの重要について強く言われている。

そのことをふまえた上で、SMMA 学校連携部会の今後の課題についてまとめてみる。

(1) ミュージアムリテラシー育成のため、ミュージアムと学校が連携した授業モデルを開発し、実践する。

■本当に学ぶことができる学校連携プログラムの質的な向上

「子どもたちは来館して、本当に学んでいるのですか。館に来て歩き回って、学んだ気持ちになっているのではないのでしょうか。」という声を科学館のボランティアの方から聞いた。また、仙台市博物館では「修学旅行生は来館するが、仙台市内の小

中学校の利用が少ない。」という実態がある。

これは、各館が提供している学校連携プログラムが、小中学校がミュージアムに求めている学習プログラムにずれがあるためではないかと考える。学校連携部会で情報交換を行い、学習指導要領や学校の教科内容と関連させ、学習のねらいをはっきりさせ、学校連携プログラムの質的な充実を図っていく必要がある。

そのためには、学校の状況、子どもたちのことが分かる指導主事と各分野について専門性を持っている学芸員が、各館でつなぐとともにそれぞれの強みを生かして、学校連携プログラムを開発していくことが求められている。

また、仙台市内の社会教育施設では、学芸員の配置のみで、指導主事の配置のない施設がある。学校連携部会での実践事例をもとに、他館で汎用できる場所を生かしていくことが課題である。

■先生を対象としたミュージアムを活用する授業のための研修の実施

ミュージアムを授業で活用するため、先生を対象としたミュージアムを授業で活用する研修を実施する。各館がそれぞれ研修を行うのではなく、教育センターの研修の一環として実施してミュージアムを活用した来館型の授業を推進する。

(2) 学校連携を軸としたミュージアムの横の連携関係をつくる。

■子どもたちの学びにかかわる人の育成と活躍の場～学んだことを生かす

科学館、博物館ではボランティアの方が自分の学んだことを生かして、学校連携を協力して行っている。ボランティアの方は、専門性、子どもたちへのかかわり方について、十分なスキルがあるとはいえない。

例えば、博物館でのボランティアの方と連携した学校連携の事例は、大人を対象としているガイドの内容を小学生に対して行ったものである。小学生を対象として学校連携プログラムとして実施するためには、①学習内容に関すること（小学校の学習内容に関連したガイドのポイント、コースなど）②子どもたちへのかかわり方に関するスキル（子どもたちを対象とした説明の仕方、発問の仕方、考えの引き出し方など）について学んでもらう必要がある。

そこで、子どものことを知っている各館の指導主事が専門性を生かし、かかわる側の大人であるボランティアの方に対して、子どもたちへのかかわり方の学習のプログラムをつくって研修していくことが必要であると考えます。

かかわる側のボランティアの方も研修を受けることで、自分の学びを子どもたちに伝えることで有用感を持ち、新たな学びの循環が生まれる。大人の学びと子どもの学びが共鳴「ともなり」して進んでいくのではないだろうか。

また、ボランティアの方にSMMAの趣旨や学校連携の意義を伝え、理解してもらうとともに、ミュージアムのボランティア同士が横のつながりをつくり、情報交換を行っていくことが課題である。

(3) ミュージアムが学校と連携した事例を Web で紹介，発信する。

■学びを広げるための学校教育部とのつながり～学びを通じた学社連携

学校教育の場においても，人や社会とのかかわりの中で様々な知識を身に付け，経験を積み重ねる学びが求められている。しかし，ミュージアムと学校が連携した学びは，学校に充分知られていないのが現状である。現場の先生が知らなければ，子どもたちがミュージアムを活用し，体験を通して学ぶことはできない。

人や社会とのかかわりの中で様々な知識を身に付け，経験を積み重ねる学びを広げ，充実させるためには，学びを通じた学社連携を通して，ミュージアムの学校連携の実態，事例について，学校教育部の関係する指導主事にも知ってもらうこと，学校現場への紹介，広報をしてもらうことが必要である。

また，博物館，メディアテークの小学校図工部会との連携は，市内の多くの小学校に情報を伝え，連携授業に取り組むきっかけとなった。博物館，地底の森，縄文の森，歴史民俗資料館が小中学校の社会科部会とつながりを持って，仙台の地域の歴史について学ぶカリキュラムを作成するなど，他の部会へも広げていくことが考えられる。

7 おわりに

第1回学校連携部会で，「イベント的な，その年だけの学校連携についての取組にならないようにしていくことが大切である。」という意見が出された。

「学び」をキーコンセプトとした街づくりであるミュージアム都市構想においても SMMMA に期待される役割は大きい。来年度以降も今年度の実践をもとに，各館が同じ方向を向きながら，各館の独自性を生かした持続可能な学校連携に取り組んでいきたい。